

日招きの清盛



民間会社を辞めて教員免許を取り、初めて赴任した中学校でのことでした。

つるべ落としの秋 クラブ活動が終わる頃、生駒山に沈む夕陽をよく目にしました。 或る日 ふと、沈む夕陽を一瞬でも

もう一度見れないものかと思いました。 平安の昔、平清盛は

音戸の瀬戸を一日で切り開くべく、沈む夕陽に向かって黄金の扇で日を招いたとの伝説があります。

夕陽が山の端に段々沈み小さくなり 最後一点になり消えた瞬間、10人くらいの生徒と一緒にエイヤッと飛び上がりました。 私や半数くらいの生徒が「ワッ、 もう一回見えた！」とのことでした。

家の塀など近くの物に隠れた物は顔をスッと上げれば勿論もう一度見る事が出来ます。

しかし遠くの山に沈んだ夕陽がもう一度見えるかどうか、言い出した私自身半信半疑でした。

その学校のグラウンドと生駒連山の距離はほぼ15km。

山頂を中心に、飛び上がる速さを考慮しての角速度と地球自転の角速度を比べました。

2つはケタ外れのズレではなく ほぼ近い値でした。

つまり、遠くの山に沈んだ夕陽が一瞬であれ再度見えたのは あながち 理に合わない話ではないと思えました。 思わぬことで、地球の自転を実感できたことでした。

スタジアム

生徒と共に飛び上がってからその後 別の赴任校での話です。

沈む夕陽が山の端にかかってから 完全に沈むまで少しの時間があります。 およそ2分間です。

その間に人が歩く距離はおよそ180mです。 古代バビロニアではこの距離を 1スタディオンという距離の単位にしていました。

やがて ギリシャ時代、大型の競技場が造営されるようになりました。

その大きさ・広さは 直線で1スタディオンとれるものでした。

それから いつしか、この程度の広さの競技場を スタジアム と言うようになったらしいです。

(生徒の反応、あっそう、、、程度でした。)